第９章　有識者からみた東北大学の地域交流

猪股歳之（東北大学大学院）
秋永雄一（東北大学）

9-1. 宮城県の有識者と東北大学
9-2. 東北大学の地域貢献－東北大学のこれまでとこれから－
9-3. 地域社会と東北大学との関係
9-4. 有識者の考える国立大学のあり方
9-5. おわりに

宮城県のひとびとにとって東北大学はどのような存在なのか。県内各界の有識者を対象にした調査から得られたデータに基づいて、その姿を描き出すのが本章の目的である[1]。しかし、その姿の全体像を明らかにするということではもちろんない。地域との交流という、一つの側面から描き出される東北大学の＜姿＞と、それを眺める県内有識者の＜まなざし＞の特徴をとらえることに分析の主眼が置かれる。

9-1. 宮城県の有識者と東北大学

9-1-1. 有識者のプロフィール

本調査に回答を寄せた県内有識者は45.4%（表9-1）である。この種の調査としてはかなり高い数字に属し、地域社会と国立大学の交流についての県内有識者の関心は高いといえる。

回答者のプロフィールをまとめておこう（表9-2）。回答者の94.8%は男性。「その他」の領域（「社会福祉」、「市民団体・ボランティア」、「報道・出版」、「文化・芸術」）では女性の比率がやや高い。

50歳代を中心に40歳代と60歳代が多いが、７県全体の比率と比べれば、宮城県の調査では40歳代の回答者が若干多い。ただし、「医療・保健」や「その他」の領域では60歳代以上の比率が半数を超えている。

表9-1　調査の回収状況および有効サンプル領域別構成比

	宮城	７県計
調査回収状況		
配布数	1,294	(8,557)
有効回答数	587	(4,040)
有効回収率	45.4%	(47.2%)
有効サンプル領域別構成比(%)		
政治・行政	42.9	(38.0)
産業・経済	15.2	(14.0)
教育	24.9	(27.6)
医療・保健	8.2	(7.5)
その他	8.9	(12.8)

表注：「その他」は「社会福祉」「市民団体・ボランティア」「報道・出版」「文化・芸術」を併せたもの。以下同じ。

[1] 本章で分析に用いるデータは、1998年６月から７月にかけて、７県（宮城、山形、新潟、広島、香川、福岡、佐賀）の有識者を対象として、郵送法を用いて実施された「地域社会と国立大学の交流に関する有識者調査」のうちの宮城県のデータである。本調査では、有識者の所属する領域を10（政治、行政、産業・経済、教育、医療、保健、社会福祉、市民団体・ボランティア、報道・出版、文化・芸術）に分類し、領域ごとに、それぞれの組織や団体の代表もしくはそれに準ずる人を調査対象として選び出している。宮城県の調査対象者は、主に『河北年鑑　1998』（河北新報社）に依拠してサンプリングをおこなった。サンプル構成の詳細と、領域ごとの回収状況については、巻末の資料篇（１．各県ごとの領域別配布数、回答数、回答率）を参照のこと。

宮城県内・東北地方内に31年以上居住している有識者は７割を超えている。しかし、「産業・経済」領域の有識者に関しては、居住歴31年以上の人は６割程度と相対的に少なく、逆に居住歴５年以下の人が２割を占めている。「産業・経済」領域には、転勤などによる比較的短期の県内居住者がある程度の割合で含まれていると考えられる。

宮城県内所在の学校を最終卒業校とする人は全領域計で62.3%、このうち、「医療・保健」領域は81.3%、「産業・経済」領域は50.0%である。

また、東北大学（学部・大学院）在学歴については、在学歴のある人は全領域計で28.3%であるが、「医療・保健」領域では79.2%、「政治・行政」や「産業・経済」、「その他」の領域では、それぞれ20.0%、18.4%、15.7%で、有識者の所属活動領域によって東北大出身者の比率に大きな差がある。

9-1-2. 東北大学への関心・関わり・認知

このようなプロフィールをもつ有識者は、東北大学とどのような関係をもっているのだろうか。県内有識者の東北大学への関心の高さ、東北大学との日常的な関わりや接触の度合、東北大学による地

表9-2　宮城県有識者の分野別プロフィール

（数字は%。ただし斜字は実数）

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	７県計
N	*252*	*89*	*146*	*48*	*52*	*587*	*4040*
性別							
男性	96.0	98.9	92.4	97.9	78.8	94.2	94.8
女性	4.0	1.1	7.6	2.1	21.2	5.8	5.2
年齢							
～39歳	8.4	10.3	6.9	2.1	11.8	8.1	4.7
40～49歳	18.0	18.4	23.4	10.4	11.8	18.2	12.7
50～59歳	54.4	35.6	43.4	31.3	21.6	44.1	44.1
60～69歳	14.0	26.4	19.3	52.1	27.5	21.5	28.3
70歳～	5.2	9.2	6.9	4.2	27.5	8.1	10.1
平均年齢	*53.9*	*54.8*	*54.0*	*58.8*	*59.4*	*55.0*	*57.3*
地元居住歴							
＜宮城県＞							
0～ 5年	11.6	21.6	0.7	0.0	5.8	8.9	7.3
6～10年	1.6	2.3	1.4	0.0	1.9	1.5	1.5
11～20年	1.6	10.2	2.7	8.3	1.9	3.8	3.3
21～30年	8.8	9.1	14.4	14.6	15.4	11.3	7.3
31年～	76.3	56.8	80.8	77.1	75.0	74.4	80.7
＜東北地方＞							
0～ 5年	9.6	20.3	1.6	2.4	7.5	8.5	8.1
6～10年	3.1	1.3	0.0	0.0	2.5	1.7	1.9
11～20年	0.9	7.6	4.7	7.3	0.0	3.3	2.4
21～30年	7.9	10.1	10.1	4.9	17.5	9.3	6.8
31年～	78.6	60.8	83.7	85.4	72.5	77.2	80.7
学校歴							
最終卒業校所在地							
宮城県内	61.8	50.0	64.4	81.3	61.5	62.3	52.8
宮城県以外の東北地方	8.0	13.6	11.6	6.3	5.8	9.4	11.0
東北地方以外	30.1	36.4	24.0	12.5	32.7	28.3	36.2
東北大学（学部・大学院）在学経験							
ある	20.0	18.4	37.7	79.2	15.7	28.7	23.7
ない	80.0	81.6	62.3	20.8	84.3	71.3	76.3

表注：７県計における地元居住歴および学校歴については、７地域毎に当該県・地方名および大学名が入る

域交流活動の認知度、東北大学からの協力要請の有無とそれに対する対応（交流）の４つの側面から、その実態を探る。

有識者の東北大学への関心についての回答結果をまとめたのが**表9-3**である。A．～D．のそれぞれについて、「あてはまる」場合に○をつける複数回答形式の質問である。東北大学について「ごく一般的なことを知っている」と答えた人は半数いるのに対して、東北大学のことに「あまり関心がない」という人は非常に少ない(2.9%)。また、ほぼ半数の人が「新聞・雑誌などで東北大学に関する情報があれば注意して読」んでおり、「東北大学が発行する印刷物によく目を通している」人も14.4%いる。つまり、県内の有識者の大多数は、東北大学に対して何らかの関心を向けているのである。

しかし、その関心の向けかたや強さは一様ではない。また、大学に関する情報取得の経路も異なっている。たとえば、「医療・保健」領域の有識者では、「一般的なことを知っている程度」への回答比率が他領域に比べて極端に低く、「新聞・雑誌などで東北大学の情報を注意して読んでいる」の比率が高くなっており、大学への関心の向け方が、より積極的だといえよう。さらに、大学が発行する印刷物など、独自のメディアを通じて大学に関する情報も多く得ている。それに比べれば、とくに「政治・行政」の領域の有識者は、東北大学への関心の寄せ方がやや消極的といえるが、同時に、大学からの直接的な情報に接する機会が少ないともいえよう。有識者の自由記述には、東北大学からの情報提供が不足していると指摘する意見が多い。

---- 宮城・東北の地域性か、東北大学全体の伝統・雰囲気なのか、地味でＰＲ下手。開放感・積極性に欠ける。---- （政治）

アンケートを受けて、自分が東北大についてイメージを持っていないことがわかった。こちらの不勉強もあるかも知れないが、大学側のＰＲ不足もあるのでは？（行政）

大学は、自立の精神は必要であるが、"情報"については、特に、地域社会に、大いに提供していく姿勢が必要である。このことは、大学が地域社会を利用し、地域社会が大学を利用するという、相互の交流関係を生み出す基となると考えている。(行政)

次に、県内有識者の東北大学との日常的な関わり・接触に対する回答結果は**表9-4**のとおりである。表中の数字は、A．～D．のそれぞれについて、「あてはまる」場合に○をつけた比率（%）を示して

表9-3　東北大学への関心

(%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A. 東北大学（地元国立総合大学）のことには、あまり関心がない	3.3	4.8	1.4	0.0	3.9	2.9	3.8
B. 東北大学（地元国立総合大学）については、ごく一般的なことを知っている程度である	55.6	54.8	47.5	17.4	52.9	50.1	52.3
C. 新聞・雑誌などで東北大学（地元国立総合大学）に関する情報があれば注意して読んでいる	38.9	40.5	50.4	63.0	52.9	45.3	42.7
D. 東北大学（地元国立総合大学）が発行する印刷物などによく目を通している	5.9	13.1	19.9	50.0	9.8	14.4	11.5
A.～D.のうちC.もしくはD.に「当てはまる」と回答した者	47.8	50.0	62.1	89.7	63.6	56.6	51.5

いる。「東北大学のキャンパスによく入る」、「職場に東北大の卒業生が多い」、「東北大学関係者と仕事で頻繁に接触がある」、「家族や親しい知人の中に東北大学関係者がいる」の４項目すべてにおいて、「医療・保健」領域の有識者の回答比率が飛び抜けて高い。４項目のうち３項目以上にあてはまると回答した者の比率（表中最下段の数字）は、他領域の10%台に対して、「医療・保健」領域の有識者は７割を超えており、東北大学との関わりや接触が日常的で身近なものになっていることがわかる。

表9-4　東北大学との日常的関わり

(%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A. 東北大学（地元国立総合大学）のキャンパスによくはいることがある	9.6	15.5	22.0	65.2	13.7	18.5	12.8
B. 自分の仕事場には東北大学の卒業生が多くいる	46.4	38.1	35.5	78.3	19.6	42.6	43.9
C. 東北大学の関係者と仕事で頻繁に接触がある	28.9	27.4	24.8	89.1	39.2	33.5	29.6
D. 家族や親しい知人の中に東北大学の関係者がいる	37.2	33.3	51.1	73.9	60.8	45.3	44.7
A.～D. いずれにも該当しない者	30.5	38.1	34.0	4.3	17.6	29.2	29.4
A.～D. のうち３-４項目に「当てはまる」と回答した者	12.6	14.3	19.1	71.7	13.7	19.4	16.6

それらに対して、東北大学が行っている地域交流活動の認知度についてみると（表9-5）、宮城県有識者に尋ねた７つの地域交流活動のうち、３項目以上を知っていると回答した者の比率がもっとも高いのは、「教育」領域の有識者（約49%）であり、逆に「医療・保健」領域の有識者では約35%ともっとも低くなっている。

表9-5　東北大学が行っている地域交流活動の認知度

(%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
1. 大学主催・共催の各種の公開講座	69.8	68.4	80.9	93.0	67.5	74.3	72.4
2. 大学施設の一般開放	25.1	31.6	32.4	23.3	32.5	28.4	21.2
3. 高校生などへの大学説明会・オープンキャンパス	15.3	15.8	40.4	16.3	22.5	22.7	27.1
4. 社会人のための教育課程（夜間課程など）	34.9	23.7	30.9	25.6	25.0	30.6	35.8
5. 各学部、研究所などが行う技術相談・技術講習会	19.1	25.0	16.2	37.2	17.5	20.6	15.7
6. 地元企業との共同研究・開発	64.7	59.2	54.4	37.2	50.0	57.6	42.4
7. 地域交流窓口としてのセンターなどの活動	—	—	—	—	—	—	17.6
8. その他	3.3	0.0	5.1	7.0	10.0	4.1	5.1
1.～8. のうち（7. を除く）、３項目以上を「知っている」と回答した者の比率	39.5	36.8	49.3	34.9	40.0	41.4	—

注１：数値はいずれも無回答（すべての活動について知らない者を含む）を除く比率。
注２：調査時点で東北大学および香川大学には「地域共同研究センター」に類する施設は設立されていなかったため、宮城県および香川県の有識者については当項目への回答がない。

各項目ごとに認知度の高い有識者の所属領域をみると、「各種の公開講座」については「教育」と「医療・保健」領域の有識者の認知度が高く、「大学施設の一般開放」については「産業・経済」、「教育」、「その他」の領域の有識者、「大学説明会・オープンキャンパス」については「教育」領域の有識者、「社会人のための教育課程」については「政治・行政」と「教育」領域の有識者、「技術相談・技術講習会」については「医療・保健」領域の有識者、「地元企業との共同研究・開発」については「政治・行政」、「産業・経済」領域の有識者の認知度が高い。全般的に、自らの所属領域に関わりのある大学の交流活動に対する認知度は高いが、自らの活動する領域と関わりの少ない交流活動については認知度が低くなっている。

県内有識者の東北大学との日常的な接触と関わりの度合や、東北大学の地域交流活動に対する認知度には地理的な要因も大きな影響を及ぼしている。本調査では宮城県全域の有識者を対象として調査を実施したが、仙台市以外の地域で活動・在住する有識者から以下のようなコメントが寄せられている。

仙台市内の事は良く判りませんが、地方におりますと、東北大学の顔というものは、ほとんど見当りません。仙台市にはあるとすれば、それは大都市集中ということだと思います。ただ全国的に見れば、私の友人・知人で東北大出身の方が御活躍されていますが、県内の地方には残念ながら関係・交流は、ほとんど無いと思います。（行政）

仙台市内に住んでいれば植物園や記念講堂など大学の施設を利用する機会もあり、割合大学も身近なものだが、地方では、ほとんど関わりのないところという感が強い。講座なども、教育関連の問題等について、大学教員に対して自治体が講演依頼をすることがあるが、聴講者をどういった層とするかなど自治体側にもノウハウが充分でなく、成果は今ひとつのようである。農村部であれば農業関連のことなど、技術的な面で交流をもつことができれば、と考える。ただ、各研究室が行っている研究のテーマと地域社会が求めるものが合致するかどうかはわからないので、どういった研究が行われているのか知る機会があればよいとも思う。（行政）

地理的な条件等から、東北大学だけでなく、県内の大学とは、交流などはなし。（行政）

郡部の高校から東北大学への進学はほとんど望めない。かつて、昭和20年代は限られた人数ではあったが進学の道が開かれていた。県内で仙台市を除く地域と東北大学の関係がうすれてきた原因がこの辺にあるのではないかと思う。また、県庁、県教育庁の職員が、各種審議会、委員会等の委員としてお願いしたり、講師としてお願いする場合があっても、郡部の自治体や企業が、東北大学とどれほど関わりがあるかも考えられないのが現状ではなかろうか。医学部は地方の公立病院へ医師を派遣している点では地方に貢献していると思う。義務教育の学校への教員養成はしていないと思うが、その辺も地域との関連がうすれてきた原因とも考えられる。（教育）

仙台市から離れた市町村は、東北大学の行事・情報等を知ることが出来ないので、県政だよりに掲載して戴きたい。（教育）

へき地の病院長のため、東北大学の地域への関心のなさ、サポートしない姿勢に問題があると思います。（医療・保健）

9-1-3. 東北大学との交流の実態

有識者と東北大学との関係について、最後に東北大学からの協力要請とそれに対する対応をみていくことにしたい（表9-6）。まず、協力要請を受けた者の比率とその要請に対して協力した者の比率を比較してみると、それほどの差はなく、東北大学から協力要請があった場合、その多くが協力していることがわかる。有識者のうち、協力要請を受けたことがある者の比率がもっとも高いのは、「大学関係者主催の会議・研究会への参加」であり、それに「専門的知識・情報の提供」、「研究助成など資金の提供」が続いている。有識者の所属領域別では、「医療・保健」関係の有識者の協力が際だって高い。ＡからＦの６項目のうち、いずれかひとつにでも協力要請を受けた経験か、協力した経験のある者は３割程度であるが、「医療・保健」の領域では９割を超えている。

表9-6　過去一年間の、東北大学（地元国立総合大学）からの協力要請への対応

上段：「要請があり、（「全面的に」＋「部分的に」）協力した」と回答した者の比率(%)
下段：「要請があり、（「全面的に」＋「部分的に」）協力した＋協力しなかった」と回答した者の比率(%)

		政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A．シンポジウム・研究会等の講師・パネラー	協力した	1.4	9.0	5.4	24.3	2.4	5.4	4.4
	要請あり	1.8	9.0	5.4	24.3	2.4	5.6	4.8
B．大学内の各種委員会等の委員	協力した	1.4	5.2	3.1	18.9	2.4	3.8	3.2
	要請あり	1.4	5.2	3.1	21.6	2.4	4.0	3.4
C．専門的な知識や情報の提供	協力した	7.4	10.5	10.8	33.3	4.8	10.5	9.7
	要請あり	7.4	10.5	10.8	33.3	4.8	10.5	9.8
D．研究助成などの資金の提供	協力した	2.8	11.7	3.9	61.0	0.0	9.0	6.9
	要請あり	4.2	14.3	3.9	61.0	0.0	10.0	7.5
E．大学関係者が開催する会議・研究会への参加	協力した	14.3	18.7	15.4	76.2	7.0	19.7	17.5
	要請あり	16.1	24.0	17.7	83.3	14.0	23.0	20.0
F．その他		4.8	2.2	4.8	18.8	3.8	5.5	5.6
A.～F.の要請のいずれかに	協力した	22.6	31.3	23.3	91.5	16.7	29.7	28.2
	要請あり	23.5	34.9	25.4	93.6	20.9	31.7	30.1

また、東北大学の教職員も参加する地域主導の研究会・交流会への参加状況についても「医療・保健」領域の有識者で参加経験のある者の比率が高くなっており、東北大学との接点が比較的多くなっている（表9-7）。

表9-7　地域主導の研究会・交流会等（当該大学教職員も参加）への参加

(%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
参加経験あり	7.5	11.4	7.0	22.2	12.5	9.6	10.9

このように、東北大学からの協力要請とそれに対する有識者の協力という側面からみた東北大学と有識者の関係は、「医療・保健」領域で密接な交流がおこなわれているのに対して、それ以外の領域の有識者とのあいだでは、交流はそれほど活発だとはいえない。先にみたように、「医療・保健」領域で

の東北大学に対する関心の高さや日常的関わりの頻度の高さなどは、この協力要請とそれに対する対応とも関係したものであるとも考えられる。

またこのことは、東北大学からの有識者に対する協力要請の頻度にも大学の部局間で大きな差異のあることをうかがわせる。有識者の自由記述でもこのことが指摘されている。

東北大は地域社会との交流にかなり力を入れていると思います。しかし、まだ悪しきエリート主義、悪しきアカデミズムがあるためか、交流の分野が限られているような気もします。今後の一層の御努力に期待します。また、理科系の学部に比べ、文科系の学部の動きが目立たないように感じますが、いかがでしょうか？（政治）

東北大学への地元の期待は非常に大きいものがあるが、大学の研究成果を地域社会が受け入れる能力の問題（企業、行政、地域住民）があるが、今後とも積極・人材・研究成果を提供して欲しい。今回の質問は難しかった（地域社会側の分野や大学側の学部間等に大きな協力関係等の差があるため、どのように評価したらよいか迷った）。（行政）

このアンケートは当方の不十分な交流あるいは専門分野を通しての感じです。分野あるいは交流の度合によっては、回答者によりずいぶんと幅のある回答になるものと思います。地域社会と大学との交流においては、地域で働くあるいは働く可能性（異動等も含む）のある卒業生と大学の連携交流ネットワークの強化の視点が欠かせないと思います。地域にある組織もしょせん"人"です。卒業生と大学の交流を活発にしていけば、地域との交流も生まれるケースが増えるものと思います。大学とパイプのない人のために、大学における窓口の設置、情報発信は大事でしょう。（行政）

東北大学と宮城県また東北地方との交流については、一部の学部、又は教授で緊密な関係が見られるものの、全般的には、積極的ではないと見られる。大学の教育研究は、地域の為だけにあるものではないので、地域側の態度にも考えなければならない問題はあるが、現状よりは、もう少し緊密な交流が望ましいと思う。（産業・経済）

学部間により差があり、的を得てない返答もあると思います。地域社会と大学間の相互理解が足りないように思います。（教育）

学部によって地域との関わりが大変異なるように思います。（医療・保健）

東北大学といっても学部や人によって差異があるが、地域との関係や交流をもっている学部や人は、多くはないように見受けられる。東北大学全体として、もっと積極的に地域との関係をもつ方向で取り組んでほしい。（文化・芸術）

9-2. 東北大学の地域貢献－東北大学のこれまでとこれから－

9-2-1. 有識者のもつ東北大学のイメージ

有識者は東北大学をどのような大学としてイメージしているのだろうか。表9-8は、大学のイメージとして挙げられている５つの項目に対する回答の結果である。これをまとめれば、東北大学は「優れた学生が各地から集まってきて」おり、「全国的にみて教育の充実した大学」で、「研究のレベルも全

国的にみて高く」、「卒業生も地域の各界の第一線で活躍している」が、「教員が地域によく貢献している」とはいえない、ということになろう。

有識者の所属領域別にみると、「優れた学生が各地から集まってきている」大学というイメージをとくに強く抱いているのは「産業・経済」、「医療・保健」の領域の有識者であり、「全国的にみて教育が充実した大学」のイメージは「産業・経済」と「教育」領域の有識者、「卒業生が地域の第一線で活躍している」大学というイメージは「医療・保健」領域の有識者、「研究のレベルが全国的にみて高い」大学というイメージは「教育」領域の有識者がとくに強く抱いている。「教員は地域によく貢献している」への貢献度評価は全体的に低いが、その中で「医療・保健」領域の有識者の評価は相対的に高い。

以上をまとめると、「医療・保健」領域の有識者は、東北大学の地域への貢献度を高く評価しており、「産業・経済」と「教育」領域の有識者は、東北大学の教育・研究面での貢献を高く評価しているということができよう。

表9-8　東北大学の全般的機能に対する現状評価

（セル内は「おおいにあてはまる」と回答した者の%）

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A．優れた学生が各地から集まってきている	58.9	62.5	58.5	62.5	45.7	58.6	24.6
B．全国的にみて教育の充実した大学である	52.3	60.9	59.4	52.1	39.1	54.3	23.7
C．卒業生は地域の各界の第一線で活躍している	44.0	45.5	42.3	54.2	50.0	45.1	30.5
D．研究のレベルは全国的にみて高いほうである	62.7	66.7	74.8	60.4	66.0	66.4	21.2
E．教員は地域によく貢献している	17.1	14.6	11.3	21.3	15.6	15.5	16.4

表注：7県計については、それぞれの県に所在する地元国立総合大学に対する評価。

この他に、東北大学のイメージとして有識者の自由記述から浮かび上がってくるのは、「旧帝国大学」、「象牙の塔」などと表現される「伝統ある大学」、「閉鎖的な大学」というイメージである。この閉鎖的なイメージを払拭することが地域交流の推進には必要であろう。しかし、後にみるように、このような意見とは対照的に旧帝国大学としての伝統を維持し、地域交流よりも研究・教育の充実を重視すべきという意見も一方では存在していることには留意しなければならないだろう。

堅いイメージがぬぐい切れていない。地域社会との交流は質量とも活発にすべき。（行政）

東北大学に対する地域の信頼感、親密感は比較的高いと思われる。地域社会がもっと東北大学に気楽にアプローチできる雰囲気を作って貰いたい。と同時に大学側も地域社会にどんどん入り込んで積極的発言を提供して戴きたい。（産業・経済）

東北大学については過去の固定したイメージが強すぎて、あまり期待は持っていません。（教育）

研究第一主義というイメージが強く、地域社会（そして一般学生）への関心がやや低いような印象がある。（社会・福祉）

東北大学と言えば、一般的イメージとしては、世界的な学問研究の場と考えられ、事実、秀れた業績を残して来られましたが、それだけ市民からは象牙の塔的な近寄り難い所という、固く閉鎖的な場として映っていると思います。（社会・福祉）

東北大の知的資源は東北全体にとっての貴重な財産。研究第一主義はそれなりに評価されるが、その成果を東北地域に還元する姿勢を全学的に強めていただきたい。現状は、一部の教官を除き、なお象牙の塔にこもっている印象が強く、市民から見ればまだまだ敷居が高い。(報道・出版)

9-2-2. 東北大学の地域的貢献範囲

次に、東北大学が地域的にどの範囲に貢献しているのか、有識者の評価をみていくことにする。表9-9は、東北大学の地域的貢献範囲についての現状評価と将来の期待についての回答を示したものである。貢献度の現状評価については、「所在県」から「国際的」へと地理的範囲が広がるにつれて「おおいに貢献している」と回答する人の比率が低くなっている。しかし、7県の合計値と比較すれば、「所在地方」よりも広い範囲については、宮城県有識者の東北大学への評価は非常に高いということができる。また、将来の貢献期待については、すべての地理的範囲について7～8割程度の有識者が「もっと貢献すべき」と回答しており、所在県だけでなく、より広い範囲での貢献を期待している。全般的には、現状評価が低ければ、それだけ将来への期待が高くなる傾向もみられるが、現状では「おおいに貢献している」と評価していても、将来さらに貢献することが必要だと考えている人が多い。

領域別には、「政治・行政」領域で、将来、「所在県」や「所在地方」への貢献を期待する声が強いが、「医療・保健」領域では、現状評価の高い「所在地方」への貢献期待は相対的に低く、現状評価の低い「全国的」や「国際的」に貢献することへの期待がかなり強い。

表9-9　貢献の地域的範囲からみた期待と評価

上段：「おおいに貢献している」と回答した者の比率(%)
下段：「もっと貢献すべき」と回答した者の比率(%)

		政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A．所在県に	現状	44.6	41.2	42.0	41.7	38.6	42.7	42.8
	将来	78.5	68.3	72.7	67.4	81.8	74.8	77.4
B．所在地方に	現状	31.9	23.5	28.9	34.0	34.8	30.3	14.7
	将来	80.9	74.7	77.0	63.6	81.4	77.6	74.5
C．全国的に	現状	19.5	26.2	22.4	14.9	22.2	21.1	5.5
	将来	74.1	75.3	75.4	77.8	71.4	74.7	72.4
D．国際的に	現状	17.3	18.3	16.9	14.9	17.8	17.2	5.2
	将来	76.5	76.3	77.4	89.1	79.1	78.0	77.5

このような結果は、東北大学の歴史と伝統、あるいは、県内の他の大学・短大との役割分担を前提にした考え方から生じてきていることが自由記述からうかがえる。

東北大学は（北大は別として）太平洋ベルト地帯にない旧帝大であり、かつ東京以北の本州唯一の総合大学であるので、どうしても東大の補完的役割を担う宿命にあるのではないか。教授陣も学生も東京志向が強い。地元県としては大変もったいない存在であるが、やはり使い切れない面は多い。オールジャパンの大学として発展してゆくべきだ。(行政)

地域社会との交流も無視すべきではないが、全国的にさらに一流の大学として研究内容を充実させることを期待する。(行政)

東北大学は歴史のある我が県の代表的な大学であるので、地域に関係なく世界的視野に立った勉学の府にふさわしい大学になることを強く希望する。(市民団体・ボランティア)

9-2-3. 東北大学の地域貢献

それでは実際に東北大学はどのような面で地域に貢献してきているのだろうか。有識者の東北大学の地域貢献に対する現状評価と将来の期待についての回答をまとめたものが表9-10である。現状評価については「おおいに貢献している」と回答した者の比率を上段に、将来の期待としては「もっと貢献すべき」と回答した者の比率を下段に示してある。

表9-10　大学の地域的機能に対する期待と評価

上段：「おおいに貢献している」と回答した者の比率(%)
下段：「もっと貢献すべき」と回答した者の比率(%)

		政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A．地域の高校生の進学機会として	現状	25.3	39.5	30.1	35.4	30.0	29.9	42.2
	将来	65.3	51.8	63.4	42.6	55.6	60.0	59.2
B．地域で活躍する人材の養成に	現状	22.0	22.1	21.9	22.9	22.0	22.0	27.6
	将来	81.5	70.2	76.1	63.8	78.3	76.7	77.1
C．職業人の再教育に	現状	6.5	3.5	5.6	8.7	4.1	5.8	4.2
	将来	89.5	78.0	84.9	77.8	85.1	85.3	85.4
D．地域住民の教養の向上に	現状	8.5	11.6	7.6	10.4	10.0	9.0	9.6
	将来	79.1	75.9	78.7	65.2	83.3	77.7	81.6
E．地域の文化の振興に	現状	7.3	16.5	11.6	10.4	8.0	10.1	9.5
	将来	83.8	75.9	78.8	72.3	85.7	80.5	82.8
F．地域の教育機関の活性化に	現状	5.7	10.7	6.2	12.5	14.0	7.9	11.6
	将来	87.2	82.7	80.6	66.0	80.5	82.5	82.5
G．地域における国際交流に	現状	12.3	15.9	14.6	22.9	12.2	14.3	8.7
	将来	77.3	78.2	72.8	74.5	82.9	76.4	79.9
H．地域の政界・行政に	現状	17.4	11.8	13.0	2.1	8.2	13.4	13.4
	将来	69.3	53.2	59.1	44.7	66.7	61.9	66.1
I．地域の企業・産業界に	現状	24.0	24.1	24.7	14.6	26.5	23.6	14.8
	将来	85.8	77.8	70.8	75.6	75.6	79.1	80.6
J．地域の保健・医療・福祉に	現状	36.3	36.0	38.9	29.2	38.0	36.5	27.0
	将来	82.8	68.8	71.9	78.3	85.7	77.8	76.1
K．市民団体・ボランティアに	現状	2.0	2.5	4.8	2.1	4.2	3.0	2.9
	将来	79.7	65.8	77.0	55.6	84.6	75.3	76.8

東北大学による地域貢献度については、大きく「地域の教育機会」、「地域の文化・教育」、「地域の行政・経済・福祉」の３つの側面に分け、計11の項目について評価を求めた。

まず、「地域の教育機会」については、「C．職業人の再教育」という面では「おおいに貢献している」と評価している有識者の比率は6%ほどに過ぎず、その分だけ将来への期待が強くなっている。特に、「政治・行政」や「教育」領域の有識者でその傾向が顕著である。「B．地域で活躍する人材の養成」については、22%の有識者が「おおいに貢献している」と評価しており、領域別の差異はそれほど大きくない。ただし、将来については「政治・行政」領域の有識者で貢献期待が強くなっているが、「医療・保健」領域の有識者ではその比率が相対的に低い。「A．地域の高校生の進学機会として」については、３割ほどの有識者が「おおいに貢献している」と回答しているが、７県計と比較すると低

い値にとどまっている。これは、先の東北大学のイメージについての回答で「優れた学生が各地から集まってきている」と評価されていたことと整合的である。このなかにあって、「産業・経済」と「医療・保健」領域の有識者では貢献評価が若干高くなっており、将来の貢献期待も低くなっている。それに対して、「政治・行政」や「教育」領域の有識者で将来の貢献期待がやや高くなっている。

「地域の文化・教育」面での現状の貢献度評価は非常に低く、将来への期待が強い。「D．地域住民の教養の向上」と「E．地域の文化の振興」では、「その他」の有識者で貢献期待が高いが、「医療・保健」領域の有識者では将来の貢献期待は相対的に低い。また、「F．地域の教育機関の活性化」は、「教育」領域の有識者よりも「政治・行政」領域の有識者のほうが将来の貢献期待を強く求めている。「G．地域における国際交流」については、「医療・保健」領域で現状評価が相対的に高く、「その他」と「産業・経済」領域の有識者で将来の貢献期待が強い。

「地域の行政・経済・福祉」面での貢献については、４つの項目について評価を求めている。「H．地域の政界・行政」への貢献については、「政治・行政」領域の有識者で現状評価と将来期待の双方が相対的に高い値となっている。それに対して「I．地域の企業・産業界」への貢献については、「産業・経済」領域の有識者の現状評価と将来期待はそれほど高くはない。「医療・保健」領域の有識者の現状評価も低い。「地域の行政・経済・福祉」面での貢献に関する４項目の中で現状評価が高いのは、「J．地域の医療・保健・福祉」面での貢献である。しかし、その当事者である「医療・保健」領域の有識者の貢献度評価は低く、しかも将来の貢献への期待もそれほど強いわけではない。むしろ、「その他」や「政治・行政」領域の有識者のあいだで将来への期待度が高い。最後に、地域の「K．市民団体・ボランティア」の活動への貢献についてみると、現状評価はもっとも低い水準にあるが、将来の期待度は領域間で大きく異なっている。

全般的にみれば、「政治・行政」領域の有識者のあいだに今後を期待する声が高く、「産業・経済」、「教育」、「医療・保健」の有識者のあいだでは、東北大学による地域貢献についての現状の評価も将来への期待もそれほど高いとはいえない。

東北大学による直接的な地域貢献を期待する意見が存在する一方で、まずは教育・研究面での充実を図り、その成果が間接的に地域への貢献に結実することを望む意見も多数みられる。

> 国際的にトップを行く研究を続けていく。その中で国際的にトップレベルの人材を育成していく。このことを基本としつつ、地域等に、その成果を公表し、また、その入門レベルのところで、社会人教育等もしていって欲しい。今、社会に出た人たちこそ、学問をしたいと強く望んでいる人が増えていると思う。（産業・経済）

> 地域に開かれた大学になることも必要と考えるが、先見性・国際性など、現状にだけ拘束されない人材育成研究を期待したい。地域交流においても、上述の視点を持って進めていただきたい。（医療・保健）

> 東北大学は国際的に貢献する大学であることを望むし、そのためには全国から優秀な学生が集まることを期待している。医学に関しては宮城県唯一の医師養成大学であるので医師の供給、病院との交流を通じて地域と密接な関係が必要で、これは現在もあるし、将来も保たれねばならない。大学院重点化が進んでいる中で研究の高度化（若手医師の大学院集中）と地域の医療レベル向上との間でバランスのとれたコントロールが必要であろう。（医療・保健）

東北大学が21世紀に亘って、国際的に研究実績の評価が一層得られる大学として充実発展していくことを期待する。いつかそれは地域社会に人材の供給をはじめ、広範な分野で大きな貢献をすることになると思う。地域においても東北大学の活用と教育・研究の場の提供など交流を深めるべき要因は多いので、ぜひ双方が一層の交流を念頭においていくべきであると思う。(社会・福祉)

9-2-4. 東北大学に期待する役割

続いて、東北大学への役割期待を他大学との関係からみていこう。表9-11がその結果をまとめたものである。まず宮城県の有識者の回答と７県の合計値とを比較してみると、東北大学への役割期待が７県合計値よりも高いのは、６つの設問のうち「行政や企業との共同研究・開発」と「地元企業への技術・情報サービス」の２項目である。この２項目は企業と大学との関係を取り上げているという点で共通しているが、ともに「政治・行政」領域の有識者で特に東北大学に期待すると回答した者の比率が高くなっている。

次いで東北大学への期待が高いのは「市民対象の公開講座等の開催」である。この項目でも宮城県有識者の半数が東北大学に期待すると回答している。なかでも「医療・保健」、「産業・経済」領域の有識者で東北大学に対する期待が高くなっているが、それでも７県の合計値よりも低い水準にある。この項目では、県内の他大学に期待するという回答が相対的に多く、県内の多くの大学で公開講座がおこなわれている状況を反映した結果といえよう。

表9-11　次の役割はどの大学に期待するか

(%)

			政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	７県計
A. 県・市行政の審議会等の委員	主に東北大学（当該大学）		42.2	31.0	31.2	33.3	35.4	36.5	49.4
	他大学	県内	10.2	17.2	16.3	4.4	10.4	12.4	9.1
		県外	2.0	0.0	1.4	0.0	0.0	1.2	1.7
	どちらとも言えない		45.5	51.7	51.1	62.2	54.2	49.9	39.8
B. 行政や企業との共同研究・開発	主に東北大学（当該大学）		67.9	60.9	58.9	60.0	60.4	63.3	58.6
	他大学	県内	2.9	13.8	7.8	2.2	8.3	6.2	8.8
		県外	0.4	0.0	0.0	0.0	2.1	0.4	2.5
	どちらとも言えない		28.8	25.3	33.3	37.8	29.2	30.1	30.1
C. 地元企業への技術・情報サービス	主に東北大学（当該大学）		62.1	55.2	58.9	54.5	56.3	59.1	57.5
	他大学	県内	5.3	12.6	11.3	6.8	4.2	8.0	10.9
		県外	0.8	0.0	0.0	4.5	2.1	0.9	2.9
	どちらとも言えない		31.7	32.2	29.8	34.1	37.5	32.0	28.7
D. 施設・設備・情報の市民への開放	主に東北大学（当該大学）		46.9	44.8	46.8	57.8	50.0	47.7	58.1
	他大学	県内	17.0	21.8	18.0	8.9	16.7	17.3	14.2
		県外	0.8	1.1	0.0	0.0	2.1	0.7	0.5
	どちらとも言えない		35.3	32.2	35.3	33.3	31.3	34.3	27.3
E. 市民対象の公開講座等の開催	主に東北大学（当該大学）		50.8	56.3	43.7	60.0	51.1	50.6	62.7
	他大学	県内	18.2	20.7	21.8	8.9	10.6	18.1	12.9
		県外	0.4	0.0	0.0	0.0	2.1	0.4	0.7
	どちらとも言えない		30.6	23.0	34.5	31.1	36.2	30.9	23.7
F. 職業人のための短期研修	主に東北大学（当該大学）		40.1	46.0	38.1	40.0	51.1	41.4	52.9
	他大学	県内	20.7	21.8	25.9	20.0	8.5	21.1	16.2
		県外	0.0	1.1	0.0	0.0	2.1	0.4	1.3
	どちらとも言えない		39.3	31.0	36.0	40.0	38.3	37.1	29.6

注：「当該大学」とは、各県毎にある地元国立総合大学を指す。

「職業人のための短期研修」は、東北大学だけでなく、県内の他大学に対する期待も高い項目である。また、「施設・設備・情報の市民への開放」を東北大学に求める声や、「県・市行政の審議会等の委員」としての役割を東北大学の教員に期待する声も低いとはいえないが、「どちらともいえない」と回答する人の比率のほうが高く、東北大にとくに強く求められていることがらだとはいえない。

東北大学に期待されていることがらについて尋ねた質問への回答結果は表9-12に示されている。東北大学への期待がとくに高いのは、「大学の情報を広く開示」すること、「大学の施設を地域住民に開放」すること、「学生を企業や自治体などで実習させる制度」を設けることの３項目である。これに比べれば、「県・市の資金が大学に受け入れられるような制度」や「地域代表が大学の運営に参加することができる制度」、「地域住民子弟の入学のための優先枠」を設けることを期待する声はそれほど高くはない。「地域住民子弟の入学のための優先枠」を設けることについては「教育」領域の有識者に期待する声がやや高く、「学生を企業や自治体などで実習させる制度」については「産業・経済」領域の有識者のあいだで、「県・市の資金が大学に受け入れられるような制度」を設けることについては「医療・保健」と「産業・経済」の領域の有識者のあいだで期待する声がやや高くなっている。

表9-12　東北大学に将来期待すること

(%)

		政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A．地域住民子弟の入学のための優先枠を設ける	おおいに期待	18.1	13.8	19.3	19.6	16.7	17.8	25.4
	やや期待	23.9	28.7	32.4	23.9	27.1	27.1	27.4
B．学生を企業や自治体などで実習させる制度を設ける	おおいに期待	30.2	33.3	32.6	31.1	34.7	31.7	38.9
	やや期待	45.9	48.3	42.4	48.9	46.9	45.7	44.2
C．県・市の資金が大学に受け入れられるような制度を設ける	おおいに期待	14.6	13.8	14.0	33.3	20.8	16.3	19.0
	やや期待	35.0	43.7	32.2	26.7	35.4	35.0	36.9
D．大学の施設を地域住民に広く開放する	おおいに期待	50.6	43.2	49.3	42.2	54.0	48.8	48.6
	やや期待	37.4	46.6	41.7	37.8	34.0	39.6	40.2
E．大学の情報を広く開示する	おおいに期待	66.7	61.4	61.8	56.5	66.0	63.7	63.6
	やや期待	28.4	35.2	33.3	34.8	30.0	31.3	31.2
F．地域代表が大学の運営に参加することができるような制度を設ける	おおいに期待	15.8	17.2	14.0	22.2	28.6	17.2	22.5
	やや期待	34.4	34.5	32.9	24.4	40.8	33.8	35.0

ここまでみてきたように、東北大学が果たすべき地域貢献については、有識者のあいだに、それを東北大学の中心的な役割とみなす意見と、あくまでも従の位置に置くべきとする意見の双方がみられる。後者の意見は、他大学との役割分担をはかるべきという考え方に立脚している場合が多い。

開かれた大学、地域との交流は大いに結構だが、それ以前の問題として、研究と教育をきちんとやるべきである。教員はアルバイトとタレント業に忙しく、学生は大学という遊園地で遊んでいる。従って、大学間の差はなくなっている。卒業後の地元定着率を考えれば、県内私大の方が地域に貢献している。そういう意味で東北大のみを特別扱いできる時代ではない。要は、地域に貢献できる人材と研究成果があるかどうかということに尽きる。大学が地域に媚びる必要はない。(行政)

地域社会との交流については、地域（学生）毎に設立されている小学校・中学校・高校が大いに考えるべきではないかと考えている。国立大学は、あまり狭い視点、つまり東北大学であれば宮城県にこだわる必要はなく、日本国あるいは世界を視野に置いた学術・研究をすれば良いのではないかと思っている。その学術・研究

を地域に還元することによって、地域との交流が図られれば、それで良いと思う。金研等、世界を視野に入れた研究を行っており、それが地域の企業に還元されている。そういうシステムを構築すべきである。(行政)

東北大学全体としては、地域社会にとらわれることなく、日本全国、世界を見すえ、短期的でなく長期的な展望に立って研究、教育をしていただきたいと思います。全国から集ってくる学生の資質は十分それに応えるに足ると信じております。従って地域社会との関係や交流は副次的なものでよいのではないでしょうか。各地に設立された県立大学はそれを補う意味でできてきたと私は考えております。(医療・保健)

(1)東北大学が地域社会と交流し、地域社会へ貢献することは大切で必要なことです。(2)しかし、各大学の使命や存在意義は大学によって異なります。全ての大学が教育・研究を等しく均一にやる必要はないと考えます。(3)大学院重点化された東北大学は全国的・国際的に役立つ人物を育成することが大きな使命と考えます。(4)そのような人が地域社会に定着する機会があれば、より大きな貢献をすると考えます。(医療・保健)

9-3. 地域社会と東北大学との関係

9-3-1. 東北大学の地域資源活用度

東北大学の教員が教育や研究に地域の資源をどの程度活用しているのか、地域に存在する5種類の資源の活用度について尋ねた質問への回答結果をまとめたのが表9-13である。

活用度が比較的高く評価されているのは、「地域の資料や情報」と「地域の自然・社会環境」である。「地域の資料や情報」の活用度を高く評価しているのは「その他」と「産業・経済」領域の有識者であり、「医療・保健」領域の有識者の評価はどちらかといえば低い。「地域の自然・社会環境」についても、「医療・保健」領域の有識者の活用度評価が低く、「その他」、「政治・行政」、「教育」領域の有識者の活用度評価は高い。

7大学の中で東北大学教員の資源活用度が比較的高く評価されているのは、「地域の自然・社会環境」と「自治体や企業の資金」である。後者については、とくに「産業・経済」領域の有識者の評価が高く、企業の資金を活用した教育・研究が東北大学では盛んにおこなわれているという認識が強いことをうかがわせる。「自治体・企業・学校などの施設・設備」の活用度に関しても「産業・経済」領域の有識者の評価が高くなっていることから、企業との連携は資金・施設・設備などの面にわたって進展しているといえるかもしれない。

「地域の人材」の活用度についても、「産業・経済」領域の有識者の評価は相対的に高いが、「医療・保健」領域の有識者の評価が低くなっており、地域資源の活用という面では、「医療・保健」領域の有識者は全般的にやや否定的な評価をしており、「産業・経済」領域の有識者の回答と対照的ともいえる傾向を示している。

表9-13 東北大学(教員)の地域資源活用に対する評価

(セル内は「おおいに活用している」+「やや活用している」の比率の計:%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A. 自治体・企業・学校などの施設・設備	37.2	45.8	35.5	37.0	54.3	39.4	38.6
B. 地域の人材	34.7	48.2	42.6	30.4	42.6	39.0	40.0
C. 地域の資料や情報	56.0	60.2	52.1	41.3	63.0	55.0	56.0
D. 自治体や企業の資金	39.4	52.4	37.2	38.6	40.5	40.9	35.2
E. 地域の自然・社会環境	61.2	57.8	60.3	41.3	77.8	60.1	55.4

9-3-2. 東北大学に対する地域各界の協力度

大学側の地域資源活用度とちょうど反対の関係にある、地域側の東北大学の教育・研究活動への協力度についても、有識者の評価を尋ねている。表9-14はその回答結果をまとめたものである。

「市民団体・ボランティア団体」からの協力度が相対的に低く評価されているが、それ以外は、おおむね半数以上の有識者が、地域の各界は東北大学に対して協力的だと肯定的に評価している。とくに、「地域の企業・産業界」、「地域の保健・医療・福祉団体」からの協力度についての評価は高く、7県の平均値を大きく上まわっており、東北大学と宮城県内の医療・保健・福祉、産業・経済の領域との結びつきの強さが回答結果にもあらわれている。これと反対に、「地域の教育界」との結びつきは7県の平均値をかなり下回っている。

表9-14　東北大学の教育・研究活動に対する地域の協力度

「とても協力している」「やや協力している」と回答した者の比率(%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A．地方自治体や地域の政界	52.2	49.4	50.7	48.9	62.2	52.0	53.7
B．地域の企業・産業界	62.8	64.0	68.1	64.4	86.4	66.3	57.3
C．地域の教育界	56.0	57.8	58.3	65.2	73.9	59.1	67.3
D．地域の保健・医療・福祉団体	58.9	72.6	62.5	85.1	66.0	64.7	59.3
E．地域の文化・芸術・マスコミ	42.7	47.6	49.7	52.2	57.8	47.2	48.3
F．市民団体・ボランティア団体	28.6	29.8	29.4	32.6	33.3	29.7	31.3

このように東北大学は教育・研究面で地域資源をある程度活用しているし、地域の側も東北大学の教育・研究に比較的協力的だといえる。しかしながら、いまだ交流と呼べるような関係は形成されていないという意見もみられ、東北大学が地域に歩み寄ることを求める声が出されている。

> 基本的には大学教育は理念にのっとり普遍的なもので良いと思うが、教員や学生、及び各種情報は地域社会と交流・提供したほうが望ましいと思われます。又、東北大学のネームバリューから敷居が高く感じられるが、逆に大学側が民間を活用することにより、地域からの信頼を得ていくような気もします。個人的には仙台市内での活躍はあるかも知れませんが、地方での東北大学の関係はほとんど聞く機会がありません。(行政)

> 職業上、関係している分野での研究水準は、国際的、国内的にあまり高くない印象であり、活性化が期待される。当所（国立試験研究機関）と東北大学との関係は、学生の受け入れ等、当所側の貢献度が高い。本来、大学が行うべき教育、指導を外部の試験研究機関に安易に頼る気来あり。(行政)

> 研究開発の成果を、積極的に地域経済に還元していこうとする姿勢を個別企業との共同研究等のシーンで実感している。設問項目としても見受けられたが、産業技術開発等の実用・応用といった実学の分野でのある程度アカデミズムを排した分野の裾野を拡げることが、産学、ひいては地域社会との交流推進につながっていくと思われる。(産業・経済)

地域が東北大に対して思っているほど、東北大は地域の方を向いていないのではという印象はあります。（教育）

東北大学は開学以来、研究第一主義を基本原則として優れた成果を積み重ねて来たが、この伝統に今後とも期待するところ大である。その反面、象牙の塔の感も無きにしもあらずで、地域社会は東北大学に畏敬の念を抱くが、必ずしも親愛の情を有していたとはいえない面があった。しかし、近年、学長をはじめスタッフの各位が積極的に地域社会との交流を図るようになって来ていることは喜ばしい限りである。地域社会も敬して畏れる意識を払拭して、気軽に交流を進めるべきだと思うが、その為にも、東北大学がこれまで以上に施設等の一般公開を促進し、人的にも一般県民との接触を多くする工夫と努力を望みたい。（教育）

9-3-3. 有識者のみた大学＝地域交流の障害

大学による地域資源の活用度や地域各界からの協力度についての有識者の評価は、現在における東北大学と地域社会（宮城県）との関係の様相を示す一つの側面である。しかし、今後の双方の関係のあり方を探るためには、「地域資源の活用」や「地域からの協力」を阻害している要因を探る必要がある。

ここでは、大学と地域との交流の障害について、大学側の要因と地域側の要因に分けて尋ねている（表9-15）。交流の障害と挙げているのは、「交流ビジョン」、「交流ノウハウ」、「交流相手」、「研究の成果／内容」に関わる４つの項目である。

有識者が交流の障害の原因を大学側に帰す傾向がみられるのは「交流相手」に関する項目であり、「教員の地域への関心の低さ」が指摘されている。しかし、それ以外の３項目では、いずれも地域側に交流の障害要因があるとみなす傾向が強い。

宮城県有識者の特徴としては、「交流の相手」における地域側の阻害要因の存在（「地域の側が地元の大学より中央の大学との交流を望んでいる」）に対しては否定的であり、「研究の成果／内容」については、地域側の阻害要因の存在（「大学の研究成果を活かせるような企業がない」）を肯定する意見

表9-15　大学と地域との交流の障害

(%)

			政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	7県計
A. 交流のビジョン	地域側の要因：	地域の側に大学との交流のビジョンがない	88.3	81.8	82.2	89.4	80.0	85.1	85.6
	大学側の要因：	大学に地域交流のビジョンがない	70.0	63.2	69.2	72.3	64.0	68.5	71.1
B. 交流のノウハウ	地域側の要因：	大学との交流をするためのノウハウが、地域の側に欠けている	89.9	84.1	84.2	89.4	82.0	86.9	88.1
	大学側の要因：	地域との交流のノウハウが大学側に欠けている	67.3	67.8	59.6	80.9	63.3	66.2	69.9
C. 交流の相手	地域側の要因：	地域の側が、地元の大学より中央の大学との交流を望んでいる	11.3	12.5	16.4	21.3	21.6	14.5	29.2
	大学側の要因：	教員の地域への関心が低い	72.1	64.4	67.8	83.0	60.0	69.7	67.3
D. 研究の成果／内容	地域側の要因：	大学の研究の成果を活かせるような企業が地域に少ない	75.7	73.9	71.9	77.1	68.6	74.0	69.2
	大学側の要因：	地域のニーズにこたえるような研究が大学に少ない	60.2	57.5	54.1	61.7	48.0	57.3	65.3

が強い。

東北大学と地域社会との交流を阻害する要因として強く認識されているのは、「交流のノウハウ」と「交流のビジョン」における地域側の要因である。すなわち、地域の側に「大学との交流のビジョン」も「大学との交流のノウハウ」もないという認識が有識者のあいだで強く、その意味では、地域側に大学との交流に不可欠な基礎的要件が現状では整っていないという見方が大勢を占めているといえよう。

自由記述からは、ノウハウ・ビジョンの欠如、教員の地域への関心の低さのほかにも、東北大学への親しみにくさ、窓口がないことなどの指摘が浮かび上がってくる。

地域と東北大学の双方に「交流」についての十分なノウハウがなく、「帝国大学」のイメージから脱却できないまま「交流」というよりは、地域が大学に教えを乞い、それを利用しているだけの関係しかないように思われます。地域は大学に教えを乞うのではなく、何を働きかけ、何に参加を求めるべきか。大学は地域に何かを教えるのではなく、何を提供し、地域から何を吸収すべきか。地域と大学とが真摯に意見を交換し、相互に理解し、共通の認識にたった「交流」を考える必要があるのではないでしょうか。(行政)

あらゆる分野で地域社会と東北大学との交流は一段と拡大すると考えているが、どのような形で可能なのかについて相談していただける窓口を大学に設置していただきたい。(行政)

研究成果を持って、町の中に下りて来て、自分の研究成果が適用出来る場がないかを自分の目で探す。そういう姿勢が望まれる。(産業・経済)

大学から積極的に地域に働きかけていくことが必要ではないか。各種審議会の委員等に名を連ねている先生方も多いが、それ以上の動きは見えてこない。地域としては、東北大に期待するところ誠に大きいものがあるのだから、両者の関係をうまくとりもつ機関が必要なのかもしれない。地域の子弟が簡単には入学できない大学ということもあって地域社会では、遠い存在として東北大をみている側面もあるのではないか。それが、交流に障害となっている面もあるように思う。(教育)

医療の分野で、東北地方の東北大学とする大学側の意識と宮城県の東北大学とする地域ニーズとに乖離が起きているのでは。(医療・保健)

福祉関係の立場にある人間として、主としてその観点からのアンケート記入になって居ります。現在の大学の研究の（大学は研究の場であるとの見方から）上で地域社会との交流は、大変難しい問題と思われます。何故なら、研究は細分化される傾向にあり地域交流という大局的立場からの物の見方と如何にマッチングさせるかが問題であると思われるからです。(社会・福祉)

9-4. 有識者の考える国立大学のあり方

最後に、東北大学に限らず、国立大学一般のあり方についての宮城県の有識者の意見をみていこう。国立大学のあり方として有識者に尋ねているのは、表9-16に示した６つの項目である。

まず、「大学の人材養成」については、「地域を越えて活躍する人材の養成を第一とすべき」という考える傾向が強く、なかでも「医療・保健」「産業・経済」領域の有識者にその傾向が強い。「大学の

教育」と「大学の研究」に関しては、地域との交流をもちながら教育・研究をおこなっていくべきと考える有識者の比率が高くなっているが、宮城県有識者では７県平均よりも低い水準にとどまっている。

領域別では、ともに「政治・行政」と「産業・経済」の領域の有識者は、地域との関わりを保ちながら教育・研究にあたるべきという考え方が強いが、「医療・保健」の有識者は反対に、地域社会にとらわれずに大学独自の教育、普遍的な学問を志向する人の比率が高くなっている。「大学の社会サービス」に関しては、地域社会に対して積極的にサービスを提供すべきと考える有識者の比率が高く、「大学と企業との関係」については、「産業・経済」と「政治・行政」の領域の有識者で企業との交流を積

表9-16　国立大学のあり方について

上段：「Aに賛成」と回答した有識者の比率(%)
下段：「Bに賛成」と回答した有識者の比率(%)

	政治・行政	産業・経済	教育	医療・保健	その他	合計	７県計
大学の人材養成について							
「A．地域の発展に役立つ人材の養成を、第一に考えるべきだ」	7.4	4.6	5.6	4.3	4.3	6.0	11.1
「B．地域を超えて活躍する人材の養成を第一とすべきだ」	31.7	37.9	34.3	41.3	25.5	33.6	26.0
大学の教育について							
「A．地域と交流して、実践的な教育の充実をはかるべきだ」	22.9	27.9	15.4	13.0	17.0	20.5	25.9
「B．地域とかかわりなく、大学独自の理念にたった教育をすべきだ」	11.8	12.8	9.8	23.9	10.6	12.3	9.3
大学の研究について							
「A．地域との交流を持ちながら、新たな時代の学問の発展をはかるべきだ」	23.6	21.8	16.8	15.2	13.0	20.1	25.6
「B．地域社会にとらわれることなく、普遍的な学問を発展させるべきだ」	12.2	12.6	14.7	21.7	17.4	14.1	10.0
大学の社会的サービスについて							
「A．地域社会のニーズに応じて、大学は積極的にサービスを提供すべきだ」	29.0	21.8	21.7	26.1	26.1	25.6	29.9
「B．地域社会へのサービスよりも、大学は教育・研究に専念すべきだ」	2.9	5.7	4.9	13.0	13.0	5.5	5.2
大学と企業との関係について							
「A．企業との共同研究や受託研究、人的交流を積極的におこなうべきだ」	41.1	47.1	27.8	33.3	36.2	37.6	38.6
「B．営利が目的となる企業との、積極的な交流は避けるべきだ」	3.3	2.3	6.3	2.2	4.3	3.9	4.0
大学教員と地域社会との交流について							
「A．学問的な発展のためにも、教員は、積極的に地域と交流すべきだ」	49.6	46.0	39.6	31.1	38.3	44.1	46.8
「B．本来の教育・研究に力を注ぐためにも、教員は、地域との交流は極力控えるべきだ」	0.4	0.0	0.7	0.0	4.3	0.7	0.8

注：本設問には、「Aに賛成」「どちらかといえばAに賛成」「どちらかといえばBに賛成」「Bに賛成」のいずれかを選択してもらった。本表に示しているのは、そのうち「Aに賛成」および「Bに賛成」を選択した回答者の比率である。

極的におこなうべきという考え方が強くみられる。「大学教員と地域社会の交流」については、教員は積極的に地域と交流すべきという意見が多く、そのなかでも、「政治・行政」と「産業・経済」の領域の有識者にその意見が強い。このように、有識者が描く国立大学のあり方をまとめるならば、地域に立脚し、地域や企業との交流を積極的におこないながらも地域を越えて活躍する人材の養成を目指すべき、ということになろう。

自由記述では、教育・研究面での活動を十全におこなうことが、結果として地域に貢献することになるという国立大学像が多く記されている。

> 設問にもありましたが、国立大学、特に東北大学は歴史も古く、蓄積されている研究成果も豊富でしょうから、地域社会との関わりにこだわることなく大学独自の理念に立って普遍的学問活動に専念することを望みたい。地域社会との関わりという点では、「大学」という組織よりも、教職員・学生を含めて個人の立場で貢献すべきと考えます。大学として地域に関わるとすれば、例えば大学の図書館には専門的な蔵書が沢山あるものと思われますが、出来れば図書館の利用を地域に開放して下さること等を希望します。(行政)

> 地元東北・宮城県との関わりも一方では大切だが、国立大学の本来的な役割は、日本全体及び世界に貢献する事ではないかと考える。その役割を担ってこそ、東北大学の将来があり、レベルも上がり、ひいては地方への貢献度も増すのではないかと思われる。(産業・経済)

> 国立大学なので、世界を視野に入れた研究をするのは当然で、その点は利益追求が中心の企業の研究所とは、自ずと異なると思う。但し、研究の成果については、積極的に情報公開、しかも、一般の素人にも理解できるようにするのも又、国立であるからには、当然と思う。その情報を、地域住民や企業がどのように利用するかは、各自の自由であると思う(当然倫理的に公開するにふさわしくない情報はフィルターにかけるシステムが必要とは思います)。大学とは知識・情報のbankですから、そして国立ですから、地域社会との関係交流とは、この知識・情報の授受を介して行われるべきものと思います。この意味での開かれた大学を希望します。(医療・保健)

9-5. おわりに

以上、東北大学に対する宮城県有識者の評価をみてきた。これらを通じて浮かび上がってきた東北大学の地域交流の特徴は以下の２点にまとめられる。

まず、有識者の意見や考え方は、所属する活動領域によって大きく異なるということである。たとえば、「医療・保健」領域の有識者は東北大学への関心・関わりが高く、東北大学からの協力要請も多く受けている。このことは、「医療・保健」領域と関わりの深い部局での地域交流が盛んにおこなわれていることを示すものでもある。その一方で、大学との交流が少ない領域も存在し、そのような領域では、東北大学に関する情報があまり伝わっていないといった問題点も浮かび上がってきた。

しかし、有識者は東北大学が地域と交流し、地域に貢献することの重要性を強く認識しており、東北大学に期待していることも明らかになった。そして、東北大学による地域貢献は、あくまでも宮城県に所在する数多く存在する高等教育機関の中にあって、とくに東北大学に強く課せられている教育・研究面での役割を遂行するなかでなされるべきものとみなされている。

東北大は地方国立大として地域社会とのより深い交流を図って、地域の人々に広く門戸を開放すべきだし、地域の企業・学校等と協同し、研究・開発をしなければならない反面、全国的な、さらには国際的な視野に立った学問・研究・開発にとり組まなければならないという、あい入れ難い教育・研究の課題を解決しなければならないと思う。地域と世界という二つの間のバランスをうまく調整してさらなる発展・活躍を期待したい。(政治)

研究のフィールドは地域にあって、成果は国際的なものとなること、あるいは、普遍的なものとなることが理想でしょうか。これが実践されれば地域に直接的に利益をもたらさなくても地域は十分満足するのではないでしょうか。(行政)

真理の探究などと偉ぶる必要もなければ、無理に地域社会との交流を表に出して自分を縛る必要もない。常に問題となっている事柄を研究し続け、その成果を公表すれば地域社会の方も必要に応じて利用することになる。成果の利用を求めて来たならば、少しでもそれを拒む姿勢を見せないことだ。そうすれば、格別地域との交流を謳わなくとも、関係は円滑になる。(報道・出版)

大学が「象牙の塔」とみなされていた時代には、東北大学にこのような期待が寄せられることは少なかったはずである。高い水準の教育・研究を主たる責務としながらも地域への貢献も推進していく大学像こそが東北大学に期待されている。その期待に応えていくことが、これからの東北大学のあり方を考えるときに、無視することのできない重要な視点となるであろう。